

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No. 147
2010(平成22)年 9月15日(水)発行



＜原爆投下を導き、世界史を変えた、たったひとつの英単語・“reject”「拒否」＞
●昭和20年7月26日、「ポツダム宣言」が米英中の三国の名で発表された。しかし、日本の鈴木貫太郎首相は28日記者会見で「カイロ宣言の焼き直しで重大ではない。ただ黙殺するだけで、戦争完遂に邁進するのみである」と述べる。●この「黙殺」の言葉は日本人にとっては「大っぴらには言えないが、心の底では認めて許す」という意味をもつが、それがアメリカ人には理解できなかった。●「黙殺」は「拒否reject」と翻訳され、アメリカの原爆投下に大きく踏み出す口実となりました。(岩波ジュニア新書・伊東壮著「1945年8月6日」より)



十五歳、父の故郷の長崎で被爆

凄惨な場面に遭遇した 後編

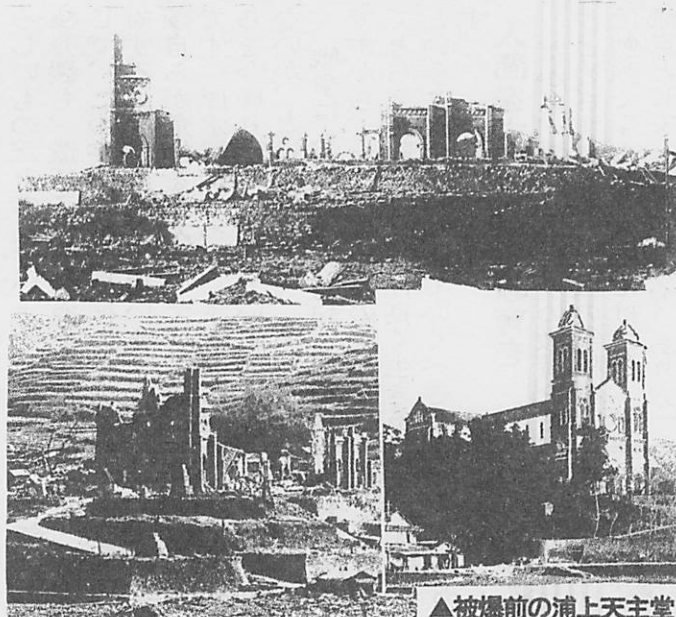
南相馬市原町区旭町 八牧将勝(故人)

前編(No.141)の内容
私は県立長崎中学校三年生の十五歳の時、長崎市の中川町郵便局の二階に下宿していた。昭和二十年八月九日は動員の夜勤だったので下宿で昼寝をしていたが、午前十一時二十分被爆した。爆心地から四キロメートルで幸いケガもなく無事だった。

忘れられない兄弟のこと

それは、顔といわず、胸、腹とグチャグチャに火傷を負った少年二人のことです。小学三、四年生の二人で兄弟のように。母親らしい女の人が懸命にうちわであおいでいます。そしてその傷口にはハエがたかっています。その筋肉だけがピクピクとけいれんを起こしています。ふと、昨日の爆弾でもハエだけは死ななかったのかと不思議に感じました。あの兄弟はその後、亡くなったと思います。また、下半身だけの男の死体にも出あいましたし、何人もがまるく車座に座ったままの死体もありました。内臓がはみ出していたり、炭素化して黒くなっているものもありました。担架で負傷者を運んでいるのですが、ピラピラと洋服が垂れているのを見たのが、実は体の一部の皮膚だったたり、無傷でも腹が大きくふくらんで死んでいるものもあり、本当にひどいものでした。

いもんです。生き埋めの学友を救おうと、原爆投下の翌々日には、Hが死んだ、Nも死んだと、学友の犠牲者の名前もわからなくなりました。Kという僧侶の子供で同級生がまだ生き埋めになっていたという情報が入り、長崎駅の近くの丘の上の方へ向かいました。二十人ほどの生徒が先生に引率されて、スコップをかついで瓦礫



▲被爆前の浦上天主堂

▲廃墟と化した浦上天主堂 爆心地から北東約500メートル。30年もの勤労奉仕と献金で1914年3月に完成。しかし原爆で壊滅し、参堂していた信徒30数人は全員即死、1万2000人の信徒のうち8500人が被爆死した。この廃墟を広島原爆ドームのように永久保存しようという声も強く長崎議会も保存を決議していたが、結局は取り壊された。

の中を進みますが、何回も死体を踏みつけそうになり、そのたびに悲鳴をあげて、先生に叱られたりしました。目的の地につくと、幸いKはお堂の下から救出されていました。瓦礫の浦上天主堂でおむすびを、その後も一ヶ月ぐらいの間に何回か、爆心地にやらされました。金比羅山から山越えして浦上へ行き、瓦礫の浦上天主堂の中でひと休みし、そこでおにぎりを食べたこともありません。浦上天主堂はひどい悪臭がして、おり、異様な雰囲気でした。食べたりおにぎりにしても、バイ菌が入ってしまったので、自分も死んでしまうのではと、本能的に恐怖感をもったりしました。(裏面につづく)

○この被爆体験は、八牧さんがお元気だった1982(昭和57)年11月14日に直接伺ったお話で、1983年発行の被爆体験談集『私も証言する』から転載しました。八牧さんは2003(平成15)年5月20日に亡くなりますが、今回ご家族のご理解を得て掲載させていただきました。

(表のページより)

たくさんの白骨化した死体 茶屋(だび)に出あったり

前には小川に死体がたくさんあったのに、その後同じ場所に行ってみると、すっかり白骨化していたり。夕方になると、あちこちで死体を焼く茶屋(だび)に出会ったり。死体には名札なんか付けてはありませんが、誰が誰かわからないまま焼くんです。友人が靴の箱に骨を入れてきて、「たぶん、おふくろの骨だろう」と言っていたり。また勇気のある友人は、燃えている最中の缶詰工場から缶詰を取ってきて分けてくれたり、本当にいろんな体験をしました。

八月十五日の混乱ぶり

「日本が戦争に負けたなら、今夜からゆつくり眠れるね」

そうこうして何日かが過ぎ、下宿の人達も早岐というところへ全員疎開することになり、郵便局にはおれなくなるので、矢上にいる友達のところへ歩いて頼みに行きました。ちょうど友達の家に着いた時、ラジオで天皇の玉音放送が始まりました。戦争が終わったことを知り、あわててまた長崎へ歩いて引き返しました。

長崎市内に帰り着くと、向かいのお婆さんが私に、「日本が戦争に負けたのは本当か」と聞いて、「本当なら今夜からゆつくり寝られるからね」とつぶやきました。私は、大人はなんて非国民なことを言うのだろうと、その時は思いました。

玉音放送を否定していた軍

夕方、軍の宣伝車が猛スピードで街を走りまわり、「こちらは西部軍、本日の放送は謀略放送なり。我々は最後の一兵まで戦う覚悟なり」と告げていました。それを聞いて、皆「二万歳」と叫びました。

でも翌日になるとそれはウソで、本当に戦争が終わったことを先生から知らされました。やっと両親や家族に会える喜びがわいてきました。しかし私の場合、実際に引き揚げてきた両親や家族に会えたのは、それから一年半も経ってからのことでした。

辛い被爆していても健康で

さて、私自身、原爆投下直後の爆心地付近を歩いて被爆しているはずですが、幸いにも後遺症は残っていません。原爆手帳は持っていて、今でも年二回の検査を受けています。が、別に異状は何もありません。

ただ、投下後の一週間目ごろに激しい下痢があったぐらいです。また蚊に刺されたあとがグチャグチャになって、なかなか直らなかったこともありますが、それはまあ、当時の栄養状態が悪かったせいかも知れません。薬の力なんか借りないで直しましたよ。

人間の心から起る戦争

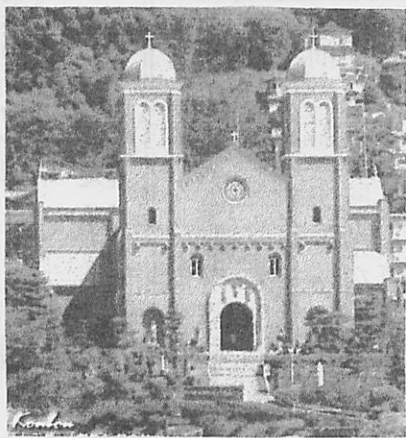
原子爆弾というものは、自然の摂理に逆らって莫大なエネルギーを生み出すもので、どうも人間の傲慢さをあらわしている、非常に危険な恐

ろしいものだと考えています。原子核分裂も、遺伝子の組み換えもおなじで、この宇宙や自然や神の摂理に対する人間の挑戦だと思っています。人類自らが危機を生み出しているわけです。原水爆によって、また同じ過ちを今繰り返そうとしているのではないかと、とさえ思います。

戦争は人の心の中から起るわけですから、一人一人の心の問題としてとらえ、隣人どおし仲良く生きるということから啓蒙していくべきです。

人間を大事にする教育を

だから、私は人づくりの教育をもっとめざすべきで、現在の学校教育は勉強で学力をつけるだけでなく、原点として「人間の生き方、あり方」をしつかり教育し、人間を大事にする人づくりができれば、この世界から戦争はなくなると思うのですが。



一九五九(昭和34)年、廃墟跡に復興された現在の浦上天主堂

今年4月 法王と対面した 「被爆マリア像」

原爆で全壊した浦上天主堂の瓦礫の中から、「マリア像」の頭部が奇跡的に発見されました。それは昭和4年に聖堂の祭壇に祭られた木製の像でした。

今年4月21日、核兵器廃絶を訴えるため、この「被爆マリア像」を携えて高見三三・カトリック長崎大司教らの平和巡礼団が、バチカン・サンピエトロ広場で、ローマ法王ベネディクト16世と面会しました。



▲「被爆マリア」と対面するローマ法王。(4月22日付「朝日新聞」より)

巡礼団はさらにスペイン・ゲルニカへ、さらに5月3日からニューヨークを訪ねた。高見三三大司教は「平和をつくる者は『神の子』と呼ばれる。長崎で起きたことを発信しなければなりません」と話しています。

○偏見を恐れず実名で被爆体験をお話された八牧将勝さんや140号の岡実さんに、心から敬意と感謝を申し上げます。「被爆体験を話すことが核廃絶につながる」と76%の国民が考えているそうです。